

バレエ・ダンスセラピーの 治療的効果についての文献研究

田 中 美 苑

Literature study on treated effect of ballet dance therapy

Misono TANAKA

奈良大学大学院研究年報 第16号別刷 平成23年3月

Reprinted from Annual Reports
of The Graduate School of Nara University
No. 16, March 2011

バレエ・ダンスセラピーの 治療的効果についての文献研究

田 中 美 苑*

Literature study on treated effect of ballet dance therapy

Misono TANAKA

要 旨

ダンスセラピーとは、たくさんある心理療法の中の芸術療法に含まれる非言語的療法である。体の動きやリズム、肌のふれあいを通して、心と体のこわばりをほぐし、自分を見つめ直す機会を提供する。音楽・演劇・絵画などと同様、芸術活動を手段として言語・非言語的な人間の表現要素に働きかけて心身の調整力を促す。そして、人間の中に本来ある自然で豊かな表現や創造性を引き出すダンスと、内的な心の問題解決に働きかける精神療法とを兼ね合わせてアプローチしていく療法である。ダンスセラピーの目的は、表現すること自体ではなく、そのプロセスに焦点を合わせ、心と身体の関係性、豊かな感性や創造性などを促進し、自分自身を肯定的に再統合していくことにある。

本研究において、歴史あるダンスセラピーとクラシックバレエを組み合わせ、発達障がいのある子どもに行うとどのような効果が生まれるかについて検討考察する。

キーワード：ダンスセラピー、クラシックバレエ、バレエ・ダンスセラピー、発達障がい

I 研究目的

様々な技法がある心理療法技法の中で芸術療法に含まれる、ダンスセラピーについて述べる。ダンスセラピーとは、思いや考えを言語化するのではなく、気持ちを表現する際に、ダンスを用いて行う非言語的表現方法である。様々なダンスが用いられている中、クラシックバレエを用いることが不適応であるとされていた。

しかし、クラシックバレエの世界や音楽がセラピーとして効果があると考えられる。特に幼児期の子どもたちの思考の中にあるファンタジーの世界とクラシックバレエの世界とは、共通する部分が多い。クラシックバレエの音楽と世界を利用し、身体を使い、集団で行うことにより、間接的に働きかけることで、自己理解・他者理解を深め、社会適応能力が自然と身につくようになり、自己表現力を強化出来るのではないかと考える。そこで、就学前の発達障がい児を対象に、バレエ・

平成22年9月17日受理 *社会学研究科社会学専攻修士課程（臨床心理コース）

ダンスセラピーを用いる際の効果について考察する。

Ⅱ 研究史

「日本人の自我形成の基盤が欧米人とは違うため、あらゆる面で内的エネルギーの弱さを感じさせられている。だから、ただ欧米のやり方をそのまま導入するだけでは駄目で、日本的なやり方を工夫せねばならない。日本におけるダンス教育は「形」の教育で、小学校から大学に至るまで、踊り手の創造力を促すよりは、むしろ体の動かし方、形の踏襲を第一としてきたのである。西洋の舞踏として入ってきたバレエ（クラシックバレエ）も体の一定の動かし方を繰り返し練習するといった、表層的な掟として広められている。」（高安、2003）

以上のことから、クラシックバレエがダンスセラピーに適応していないのはなぜか、可能性はないのか、本論で考えていく。

Ⅲ クラシックバレエについて

Ⅰ. クラシックバレエ

クラシックバレエの起源には諸説あり、正確な起源は未だにはっきりしていない。その中でも有力とされているのが、イタリアで誕生しフランスで普及し始めた説である。ロシアがクラシックバレエの本場とされているのは、クラシックバレエが急速に発展した土地だからである。イタリアはクラシックバレエのイメージがあまり定着した国ではない。しかし、クラシックバレエは、ルネサンス期のイタリア生まれなのだ。貴族達が宮廷での舞踏会で踊るものとはほぼ変わらない内容で、動きやテクニックなども現代のバレエとは全く違うものであった。クラシックバレエとは「踊り」と認識されがちだが、厳密に言うと「言葉を使わない演劇」の様なものである。有名な白鳥の湖などのクラシックバレエ作品はあるが、どの作品も言葉は一切使用しない。しかし全てにストーリーがあり、それぞれ役がありそれぞれが演じるのである。もちろん踊りの技術を磨くのだが、配役があり人物を演じるのが正確なクラシックバレエである。言葉を使わない代わりに、“マイム”と呼ばれるジェスチャーのようなものを使い表現する場面もある。

Ⅱ. クラシックバレエ作品

まず、世界的にもよく知られているチャイコフスキーの音楽「白鳥の湖」である。白鳥の湖は、1877年にヴィンツェル・ライジンガーが振付けたロシア帝室バレエ団の公演が初演である。同じくチャイコフスキーの「眠れる森の美女」は、1890年にマリウス・プティパの振り付けによりロシア帝室バレエ団が行った。古典バレエ様式の頂点に君臨する作品である。世界の三大バレエと称されるのは、「白鳥の湖」、「眠れる森の美女」、そしてクリスマスの時期に世界各国のバレエ団が公演を行う「くるみ割り人形」である。くるみ割り人形の初演もロシア帝室バレエ団である。1892年にレフ・イワーノフが振付けた。子ども向けのファンタジーは、大人の鑑賞にも堪えうる

人間ドラマになった。

古典バレエの作品は他にも様々あるが、小説を原作とした2作品について挙げる。ミゲル・ア・セルバンテスの小説「ドン・キホーテ」を題材にしたバレエは、光と影の国スペインを舞台にした作品である。現代では最も人気のあるバレエである。初演は、ルドルフ・ヌレエフが1966年にウィーン国立劇場バレエに振り付けものである。日本での上演はあまりないものの、悲恋の恋人の代名詞とされるシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」である。1965年にケネス・マクミラン振り付けで英国ロイヤル・バレエ団が初演した。

III. 日本とクラシックバレエ

日本にバレエが入ってきたのは1912年、イタリア人教師ジョヴァンニ・ローシーがロンドンからやってきたときだと考えられている。その後スミノルワ、ロマノフ、アンナ・パプロワといったロシア人のバレエダンサーが来日公演を行うようになり、徐々に日本人のあいだにバレエを広げていった（佐々木、2001）。

1960年代まではソ連の影響が強く、日本人ダンサーがモスクワやレニングラードに留学したり優れたロシア人教師が日本に招かれたりして、技術がめざましく向上していった。また、若手のダンサーが海外のコンクールに挑戦しはじめたのもこの頃からで、橋バレエ団出身で松山バレエ団プリマの森下洋子は世界的な名声を得るまでにもなった。いまの日本人女性ダンサーでもっとも知られているのは彼女かもしれない（佐々木、2001）。

私立の大きなバレエ団が林立する中で、1997年に東京に新国立劇場がオープンし、定期的にバレエとコンテンポラリー（現代舞踊）の公演が開かれるようになった。新国立劇場バレエ団は全国的なオーディションによって選ばれた契約ダンサーと登録ダンサーによって構成されていて、関西出身のダンサーも多く活躍している。私立バレエ団に比べて国立のほうが経済的にも優位ではあるが、各バレエ団の代表者たちが全面的に協力しているので、そのために私立のバレエ団が難色を示すというようなこともない。しかし、ロシアやフランスをはじめ、イギリスや中国、韓国などの他国に比べると、いまだ国立のバレエ団としての骨組みを持つに至らず付属のバレエ学校もないので、カンパニーとしてはまだまだ未熟であると思われる（佐々木、2001）。

IV. クラシックバレエの指導法

筆者は20年間クラシックバレエを習い、3年ほど就学前の子どもたちのクラスの指導に入った。ここでは、実際に行ってきたクラシックバレエの子どもクラスの構成や内容について挙げる。中学生になるまでの子どもたちには、スタンプカードがある。レッスンに行く度にスタンプが押してもらえる。スタンプカードがいっぱいになると、プレゼントがもらえるというシステムになっている。始まりと終りを明確にするために、音楽が流れるとレッスンの始まり、終わりの曲という風に子どもたちに分かりやすくしていた。

〈対象児〉

3～6歳の男女児（就学前児）

〈レッスン時間〉

60分

〈レッスン内容〉

1. スタンプカードにスタンプを押す
2. スキップ
3. 変身スキップ (スキップをしながら動物等になる)
4. ストレッチ (前屈等)
5. けんけん
6. 手拍子によってリズムを取る練習
7. ベったん (横の開脚で壁につける)
8. ポールドブラ (手の運び)
9. 川ジャンプ (絨毯パネルを川に見立ててジャンプの練習)

Ⅳ ダンスセラピーについて

Ⅰ. ダンスセラピーとは

ダンスセラピーの正式名称は、ダンス／ムーヴメントセラピーである。以下は、ダンスセラピーとする。「個人の情緒、身体、認識の統合を促すために動作を精神療法的に活用するプロセス (ATDA、1966) で定義されている、と (ジョーン、2008) は述べる。素直に喜びのためだけに動かなくなり、深い思考や感情を表現するために身体を使うことを大人になっていくにつれて、忘れていった。ムーヴメント (動作) には限りない可能性が秘められているのである。

平井 (2006) は、ダンスセラピーについて以下のように述べている。ダンスは遊び、自由になることが許される場、人と人をつなぎ、日常を新生させてくれる。日常生活と異なるダンスの動き (回転、後退、繰り返し) の非効率性こそ、日常を超える仕掛けである。見知らぬ人びとと群れ、混沌という非日常を創り出すこともできる。そして、ダンスセラピーのダンスは、身体能力に応じたその人なりの動きが織り成す身体表現である。人がありのまま許容される身体活動である。ダンスセラピーの空間は、動きやリズムを共有し、他者と交流する心地いい居場所である。つまり、ダンスは、非現実的は時空間で枠組みされたイメージを繰り返す遊びである。イメージの力は、私たちの心とからだを日常空間から連れ出してくれる。

ダンスセラピーは、リハビリテーションとしてのセラピュティック・ダンスとダンスセラピー、レクリエーションのためのセラピュティック・ダンスとダンスセラピー、そして自己表現によって自己とはなにかを見つめて見つけるダンスセラピーとに分かれる。

Ⅱ. セラピストとしての役割

高安 (2002) は、ダンスセラピーには、個人のセッションとグループのセッションとがあると述べている。どちらのセッションにも共通して最も大切なことは、治療としてセッションが成り立っているか否かである。セラピスト自身がその場にいかに臨在し、身体に感覚を空間に広げ、

患者一人一人がどういうところにいるかを感じ取り、身体を機能的に動かしながら、交感、副交感神経レベルの動きへと感覚層を微妙に変えながら、どのように導入していくかをみるのである、と述べている。ダンスセラピーの場合はセラピストの能力により治療レベル・治療形態も変わってくる。ゆえに、セラピストが枠作り・安全な空間作りをしながら、セラピスト自身の守りの空間の変化も必要となってくる。

そして、からだの動きを通してクライアント本来の姿、あり方にいかに深い層からかかわり、寄り添い、そこを動かしていけるかが取り上げられなければならない。

III. ダンスセラピーにおける感情表現

近年の神経心理学の発達によって、人の成長には非言語的、とりわけ身体動作次元での情緒的交流が基盤となることが説かれ始めてきている。ダンス/ムーヴメントセラピーを通して、少しずつ溶かれていく身体と共に、感情の流れが内から外へと動き出し、回復への一歩となっていくことは、少ないようである。(神宮、2008)

そもそも感情表現は身体的なのである。心の内に生じたものが身体を通じて感情になる。

ダンスセラピー＝踊る療法ではない。感情を身体的に表すことから、表現は始まり、自分と向き合うことからダンスセラピーは始まっているのだ。

V 発達障がいについて

1. 発達障がいとは

発達障害支援法によると、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう。」「“発達障害者”とは、発達障害を有するために日常生活又は社会生活に制限を受ける者をいい、“発達障害児”とは、発達障害者のうち十八歳未満のものをいう。」(第二条)と定義している。

発達障がいは、幼児期・児童期・青年期に初めて診断され、様々な領域において機能上制限のある障がいという定義が一般的なものだ。つまり、発達障がいという概念は非常に大きな枠組みであり、具体的な姿というものは明確ではない。現在日本ではDSM-IV-TR（以下、DSM）の基準を用いることが最も普及している。このDSMによると、発達性協調性運動（学習障がいなど）・コミュニケーション障がい（言語障がいや音韻障がいなど）・広汎性発達障がい（自閉症など）が代表的な障がいとされている。しかし、この3つも多少大きな枠組みを持ち、具体的な障がい名ではない。発達障がいの代表的なものとして、知的障がい、広汎性発達障がい（自閉症）、高機能広汎性発達障がい（アスペルガー症候群・高機能自閉症）、注意欠陥多動性障がい（ADHD）、学習障がいなどがある。発達障がいの状態は様々である。また、同じ診断名でも、子どもの個性や、発達の状況や年齢、置かれた環境などによって目に見える症状は異なる。障がいがあるということでひとくくりにするのは間違いである。大切なのは一人一人を理解することが必要である。特に、自閉症を中核とする自閉症スペクトラムとも呼ばれる広汎性発達障がい等

の場合、その半数ほどは知的障がいを持たない。このような高機能では一般的にとらえられている障害というイメージとは一見異なるように見える。しかし、幼少時からの一貫した指導がないと二次的な問題が大きくなり、知的な能力は高くとも社会適応は難しくなることがある。

播磨 (2008) を基に、発達障がいとして定義される自閉症が含まれる広汎性発達障がい、高機能広汎性発達障がい、LD、ADHDの特徴についてまとめる。

1. 広汎性発達障がい (自閉症スペクトラム、自閉症ファミリー)
 - …社会性の障がい、コミュニケーションの障害がい、こだわり行動がある。
2. 高機能広汎性発達障がい (高機能自閉症、アスペルガー症候群、非定型自閉症)
 - …広汎性発達障がいの特徴に加えて、IQ70以上が主な特徴
3. ADHD (注意欠陥多動性障がい)
 - …注意散漫・不注意、多動、衝動性、優先順位がつけられない。
4. LD (学習障がい)
 - …特定の学力が知能に見合わない程度に著しく落ち込む症候群であり、教育用語では“Learning Disability” 医学用語では“Learning Disorder”となる。

II. 発達障がい児との触れ合い

A市にある就学前の親子が通うセンターでのボランティアに参加した。主に、発達の遅れがみられる子どもたちが通園しており、遊びを中心としたプログラムで行われている。ボランティア自体は、4ヶ月間週に1回のペースでの参加であったため、当初は対応に困った。しかし、回数を重ねる毎に信頼関係が形成されつつあった。たくさん子どもたちと出会ったが、BちゃんとCくんについて、保育時間内の自由時間やお歌の時間に行った簡単な触れ合いについてまとめる。

<Bちゃん>

- ・X年3月 初めて会う。私の問いかけには一切反応なし。黙々とひとり遊びを行う。
- ・X年5月 2度目の対面。前回と同じく、ひとり遊び。帰る時間が近付いた頃、ぐずり出す。泣くので“だっこ”を試してみた。落ち着く。おろすと泣くので、抱いていた。終りの歌になり、歌にあわせてリズムを取り、ジャンプや揺らすといった行動をした。今まで、なんの反応もなかったBちゃんから笑顔と大きな笑い声が出た。

<Cくん>

- ・X年5月 自閉傾向が強く、最初から最後までひとり遊びを繰り返す。部屋の隅や狭いところが好きみたいだ。近寄っていても反応はなし。後ろをついて行くだけという行動をしていると、少し高い塀に登りたそうにしていた。そこで、手を貸してみた。すると、手を出してきたので、登らせてジャンプをするという行動を何回か繰り返した。他の子が入ってきたので関係は解消された。
- ・X年6月 会うのは2回目であるが、全く反応はない。関係が生まれることはなく、終りに近

づいた。戦いをしていた男の子たちがいた。そこにCくんを抱きかかえ、戦いに参加した。徐々に楽しくなったのか、声を上げて喜んでた。そこで、Bちゃんにも行った音楽に合わせてジャンプやゆする等を行った。これも、好反応。その後、他の子どもも含めて戦いごっこをした。そのときには、大声で笑っていた。そして最後には、はっきりと「だっこ！」と求めてきた。

BちゃんやCくんとの触れ合いから、発達障がいを持つ子どもであっても、音楽やリズムそして触れ合いをあまり嫌わないことが分かった。

BちゃんCくんともに抱っこされることを抵抗しなかったのは、母子間の愛着関係が深まっており、子ども自身に安全感が育まれていく。ここで育まれた安全感が彼らの環境世界に対する知覚のあり方を大きく変えることになる。

VI 発達障がい児バレエ・ダンスセラピー

I. バレエ・ダンスセラピー

バレエ・ダンスセラピーとは、クラシックバレエとダンスセラピーの融合である。基本となるのはもちろんダンスセラピーであり、その中に、クラシックバレエを織り込む。

平井（2006）も述べているように、ダンスは遊び、自由になることが許される場、人と人をつなぎ、日常を新生させてくれる。日常生活と異なるダンスの動き（回転、後退、繰り返し）の非効率性こそ、日常を超える仕掛けである。見知らぬ人びとと群れ、混沌という非日常を創り出すこともできる。このダンスをクラシックバレエというダンスを用いるのである。

その中でクラシックバレエを使用するのは、音楽療法とダンスセラピーを用いることでもある。クラシックバレエの音楽を用いることは、非現実の世界に入りこみやすい。独特のリズムや感覚に身を任すことで、セラピーに繋がる。

II. 発達障がい児とバレエ・ダンスセラピー

城山（2004）は、心身障がい児、特に重複障がい児にダンスセラピーを行った。重複障がい児に対する統一されたダンスセラピーの手法は存在し得ない。しかしながら、ダンスセラピーを行ううえで、共通して認識すべき点があるように思われる、と述べている。筆者の考えるバレエ・ダンスセラピーに（城山、2004）の述べる認識すべき点が共通すると考える。共通する部分が、以下の5点である。

1. セッションの構成に対する場の理解の問題…言語的教示に頼ることなく、実体験から少しずつ参加者から体による理解を進めていくことが重要。
2. コセラピストの存在意義…セラピストと共に協力しながらセッションを作り上げる役割を果たす援助者の存在意義。全体の流れにおいて参加者を個別に支える存在。
3. 動きを重ねるセッションの構成…セッション参加者全員が共通して出来る動き。
4. 道具の活用…自発的な動きを促すために道具を活用。ダンスセラピーではプロップともい

う。

5. タッチング…触覚によるタッチング。コミュニケーションの基本。侵襲的にならぬよう配慮が必要。

III. バレエ・ダンスセラピーのセッションの構成

今後バレエ・ダンスセラピーを行う上で、セッションの構成を挙げる。子どもの集中力や体力の限界があるので、30～60分のセッションで行う。主に、クラシックバレエ曲「くるみ割り人形」や「眠れる森の美女」、「 Coppélia」の曲を用いる。セッションの始まりから終わりまで音楽を用いる。発達障がいを持つ就学前の子ども 6人程度を対象とする。(以下、子どもたち) 城山(2004)を利用しまとめたのが、以下の構成である。

<導入>

心も体もリラックスした状態にする必要があるので、環境に慣れさせる必要がある。ここでは無理やりにリラックスを求めるのではなく、子どもたち自身の意思に任せ、子どもたちのリズム、ペースに合わせる。(10～15分)

<展開1>

一人ではなく、周りにヒトがいることを知らせるために、集団活動を行う。言葉ではなく、絵や身体表現を利用してまねっこ活動を行う。(10～15分)

<展開2>

他者との関係を目的とする。クラシックバレエの就学前の子どものクラスの要素を組み込む。スキップ、なりきりスキップ(動物等になりきってスキップをする)、ジャンプ、川ジャンプ、簡単な動きと合わせて自己表現を身に付ける。(15～20分)

<終結>

クラシックバレエで行うストレッチを取り入れ、心と体のクールダウンを行う。(5～10分)

VI 結 論

クラシックバレエはダンスセラピーとして成り立たないとされているが、本当にダンスセラピーとして成り立たないのか、と仮定を立てた。しかし、クラシックバレエの音楽とクラシックバレエの動き、クラシックバレエの世界を利用することは、セラピーとして成り立つと考え述べてきた。

まず、クラシックバレエの全てを用いることは、ダンスセラピーの本来の目的、内に秘めた感情や思いを身体表現であるダンスを用いて表現する目的を失うと分かった。なぜなら、セラピスト側が提供し進行することが多いとダンスセラピーは成り立たない。クライアント側の発信により、クライアント始動により成り立つ。研究史の中に「日本人の内的エネルギーの弱さ」という部分がある。つまり、ありのままの自分を感情豊かに表現することに抵抗があり、難しいのだ。バレエ・ダンスセラピーはクラシックバレエの物語を利用するので、完全に自分をさらけ出すの

ではなく、少し距離を置き、自分を表現することになる。つまり、日本人が苦手とされている自己表現がしやすくなる。

次に、バレエ・ダンスセラピーを発達障がい児を対象に行う。発達障がい児は外界との交流が苦手である。これは、日本人が苦手とする部分に共通する。それに対し、子ども特有の想像の世界に加え発達障がい児には、大きな自分しか分からない世界観を持っている。その独特の世界とクラシックバレエの世界を繋げる。要するに、それぞれの想像の世界にしながら、体を動かすことを集団で行うことで、集団行動と自己表現力を強化出来る。さらに、自己理解・他者理解へと繋がるのだ。河合（2002）の中に子どもに大切なこととして挙げられている3点が以下である。

- ①ファンタジーの世界で生きている。…想像力を鍛え、集中力がつき、落ち着きが得られる。
- ②共に楽しむ仲間がいる。…兄弟姉妹、同級生の友だち、近所の学年の違う友だち、その中のリーダー格の存在。
- ③身体を目一杯動かすことが必要である。…体操やスポーツ遊びに加え、ダンスも入る。

つまり、クラシックバレエにはこの3点が含まれているのである。都筑（2008）の中には、「時間を忘れて夢中になった遊び、無限の広がりにもまいた想像や空想の世界、引き込まれた世界の不思議さに心躍ったあの日……。」とある。子どもの頃は、全てが想像の世界であった。毎日わくわくドキドキすることがたくさんあった。そして、いつのまにかそんな心躍る想像の世界での生活からひとりひとりと抜け出していく。成長ととらえるといいのだろうか。そんな想像の世界、空想の世界が、クラシックバレエの世界では存在するのだ。子ども大人と区別することなく、想像や空想の世界に入れる。

すなわち、発達障がい児へのバレエ・ダンスセラピーは可能であると立証されるのである。

Ⅵ 今後の課題

発達障がい児へのバレエ・ダンスセラピーが可能である。つまりクラシックバレエの世界がダンスセラピーとして成り立ち、療法として可能性がある、述べてきた。言葉を使わないコミュニケーションであり、言葉を使用しない療法としては成り立つ。はたして、ダンスセラピーとして反してはないのだろうか。

ダンスセラピーとは、第一条件としてクライアント主導によって成り立つ。クライアントの内なるエネルギーをセラピストが瞬時に感じ取り、セラピストがクライアントについていくのがダンスセラピー本来の形なのだ。筆者の考えるバレエ・ダンスセラピーは、全てがクライアント主導ではない。多少なりともセラピスト側がアクションを起こし誘導する形となる。

何よりダンスセラピー界において、セラピスト側からの働きかけは、極力少なくなくすることが望ましいとされている。しかし、バレエ・ダンスセラピーはセラピストが働きかけ、道筋をつけたセラピー内容のもと行われる。クライアントの気持ちを感じ取ることは同じであるが、セラピーの内容・構成はセラピストが作り進められる。クライアント始動ではなく、セラピスト始動では成り立たないのは本当なのだろうか。

クライアント主導でなく、セラピスト主導がセラピーとして成り立たないのかどうか。クラシックバレエの世界を用いることが悪い先入観にならず、クライアント自身の自己表現の手段として成り立つか。以上のことを踏まえクラシックバレエを最大限利用し、セラピーとして成り立たせることにより、これからのダンスセラピー界をさらに躍進させるだろう。

Ⅹ 文 献

<引用文献>

- 河合肇雄 (2002) 「河合肇雄著作集 第Ⅱ期 子どもといのち4」 岩波書店
佐々木涼子 (2001) 「バレエの宇宙」 文藝春秋
ジョン・ウィットイグ (2008) 「新しい芸術療法の流れ クリエイティブ・アーツセラピー」
関則雄編 フィルムアート社 164~169ページ
城山ゆかり (2004) 「芸術療法実践講座⑤「ダンスセラピー」」 飯森真喜雄、町田章一 編 岩崎学術出版社
第6章97~111ページ
神宮京子 (2008) 「新しい芸術療法の流れ クリエイティブ・アーツセラピー」 関則雄編 フィルムアート社
81~85ページ
高安マリ子 (2002) 「臨床心理学 第2巻第4号 高齢者の心理臨床」 491~495ページ
高安マリ子 (2003) 「心理療法プリマーズ表現療法」 山中康裕編 ミネルヴァ書房 123~140ページ
都筑学 (2008) 「やさしい発達心理学 乳児から青年までの発達プロセス」 ナカニシヤ出版 119~123ページ
平井タカネ (2006) 「ダンスセラピー入門ーリズム・触れ合い・イメージの療法的機能ー」 岩崎学術出版社

<参考文献>

- 有吉京子 (1996) 「白鳥の祈り①~②」 秋田書店
有吉京子 (1997) 「ニジンスキー寓話①~④」 秋田書店
梅田忠之 (2001) 「ダンスセラピーと催眠療法」 ふたば書房
小林隆児 (2000) 「自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—」 ミネルヴァ書房
ジャン=ピエール・クライン (2004) 「芸術療法入門」 安部恵一郎・高江洲義英 訳 白水社
ジョアン・ルイン (2002) 「ダンスセラピーノート」 平井タカネ監修 小学館スクウェア
鈴木晶 (2000) 「バレエの魔力」 講談社現代新書
戸部けいこ (2007) 「光とともに… —自閉症児を抱えて— ①~③」 秋田書店
ナタリー・ロジャース (2000) 「表現アートセラピー」 小野京子・坂田裕子 訳 誠信書房
播磨俊子 (2008) 「発達障害児への心理的援助」 鶴光代編 金剛出版
日野原重明 (1996) 「音楽の癒しのちから」 春秋社
守屋慶子 (1994) 「子どもとファンタジー 絵本による子どもの「自己」の発見」 新曜社
八木ありさ (2008) 「ダンスセラピーの理論と方法 舞踊心理療法へむけての序説」 彩流社

<参考資料>

- 世界の名作バレエ (DVD) 解説書 クリエイティブ・コア株式会社
ダンスマガジン 2005年6月号~2009年12月号 新書館
文部科学省 発達障害者支援法 <http://www.mext.go.jp/> (2009/11/10)